

---

# 鎮魂歌

宗像竜子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鎮魂歌

### 【Zコード】

N11980

### 【作者名】

宗像竜子

### 【あらすじ】

赤い月と白い月、二つの月を持つ世界を舞台に、死者の魂を送る役目を担つた巫女を主人公にしたシリアルFFT。

歌いましょう 称えましよう  
静寂と眠りの支配する 月の夜の夜

始まりと終わりを識る 女神の御許みもと

願いましょう 祈りましよう

過去と未来の狭間 この星の宵

豊穣と魂を運ぶ 風を招く為

巡るは、  
いのち 生命

生きるものはいつか死に 死したものは眠り  
眠りしものはまた 新しい日を知るのでしきつ

忘れましよう 夢見ましよう

有と無の区別のない この夜の闇

わたしあもいつか そこへ行くのでしきつ

回るは、時の環わ

記憶は思い出に 思い出は美化され  
磨かれた記憶はまた 新たな想いを生むのでしょうか

+ + +

赤い月が、昇る。

今宵、器を失つた迷える魂を、その向る常世トライルへと導く為に 。

宵闇に歌声が響く。

密やかに しめやかに。大気の琴線を震わせるそれは、月が天頂間近にまで昇つても途切れる気配がない。

村外れのいくらか開けた場所。夜空と荒野を広く見渡せるそこで、娘達が直接地面に車座になつて座り、歌を歌っている。

一人が歌い終わると次の一人、その者が終わるとまた次がと、歌い手こそ変わるものの、紡がれる歌は全て同じだ。

娘達の輪の中心には、焚き火がささやかな明かりと熱とを振りまいている。

もつとも、それは秋の肌寒さから娘達を守るものでもなければ、獸避けでもなかつた。確かにそれは、いくらかないと暖も取れるだろうが、目的は別にある。

それは 送り火。

娘達は歌う。その歌声は年齢による深みはない代わりに透き通り、母性の持つ包容力が乏しい代わりに何処までも響く。

その歌は、月が地平の端へと姿を消すまで終わる事はない。

何故ならその歌は、死者を悼み、その安らかな眠りを祈ると同時に、月の女神を称えるものであるからだ。

まるで何かの結晶のような、潔癖な歌声が夜の空へ溶けて消える。

その空に浮かぶのは、一つの月 一つは白く、一つは赤い。

白の月は『生』を、赤い月は『死』を司る。

月の女神は一面一柱の神。二つの相反するものを内包し、それは一つの現象を起すとされる。

それは『再生』、もしくは『不变』。…転じて、『輪廻』。

死者を送るのは、決まって未婚の娘達だ。それはその身が、将来新たな生命を生み出すからに他ならない。死した者が再び人の子として生まれてくるよう、未来の母として祈り願うのだ。

生命は巡り、繰り返す。

大地と天へ還つた生命は、いつか新たなる父と母を得て、再びこの現世へと戻る。

彼等はそう、信じていた。

+ + +

(…泣いては、だめ)

歌の輪から少し離れた場所に、少女が一人月を見上げて立つている。

その服装は、飾り気のない貫頭衣を身に着けている他の娘達とは異なり、様々な色に染められた布をさらにその上からぐるぐると巻きつけていた。

年の頃は十六、七辺り。

すでに成人は済ませていて不思議はないのに、成人女性の証である結髪はせずにそのまま背に流している。そして、その白い顔には、赤い染料で目元に模様が描かれていた。

その手に細長い棒を持ち、手足には身体に巻きつけている布と同じ色に染められた糸が、装飾のように巻かれている。足は裸足で、そのまま大地を踏みしめていた。

(これは神聖なる儀式。…涙で台無しにしてはならないわ)

月を見上げたまま、少女は心の中で自分に言い聞かせる。

赤い月はもうまもなく天頂に差し掛かる。その時、少女は己にし

か出来ない特別な役目を果たさねばならなかつた。

少女は巫女。村に唯一人の、神の依り巫。

人が生まれれば女神に代わって祝福を与え、人が死ねば全ての村人に代わって未だ現世に繋ぎとめられている魂を鎮め、女神の御許へと送り出す。それが役目。

娘達の歌は舞台。少女は歌によつて作られた場で、死者を送る舞いを踊る。その時、少女は少女自身ではなく、女神の依り巫でなければならない。

：『人』の感情を、引きずつてはならないのだ。

たとえ、今宵送る魂が、彼女の唯一の肉親 兄のものであつても。

（わたしは巫女。役目を果たさなければならぬ…悲しんでは駄目。兄さんはこれから女神の御許で眠り、そして月日が満ちれば、また新しい生命を賜<sup>たま</sup>わるのだから）

月を見上げて続けてているのは、時を見計らつてしている為ではない。そうしなければ、ふとした弾みで涙が零れ落ちかねないからだ。最も神に身近な者が、人としての情に引きずられるなどあつてはならないこと。

今まで送つてきた魂と同じように、無事に女神の元へ辿り着けるよう祈るべきなのだ。

（…悲しんでは、だめ）

早くに両親を亡くし、一人きりの家族だった。

前代の巫女の元へと弟子入りした為に、共に暮らした時間は短かつたけれど、その分、仲が良い兄妹だったと思う。

兄は村一番の働き者で、少し引っ込み思案だったけれど誠実な人柄だった。争い事は嫌いで、若者達の間で喧嘩が起これば、まず仲裁に入る人だつた。

修行が辛くて泣いていれば、何も言わずにただ側にいてくれた。見守ってくれるその事が、どんなに心の支えになつただろう。

：村の皆さんに好かれていたと思う。この儀式の前に執り行われた葬

儀では、動けない者を除けば全ての村人がその死を悼んでくれた。

もう、あの優しかった人はいない。

(どうして…兄さんはこんなに若くして死なねばならなかつたのだろう。女神はどうして、兄さんを早く手元へ招かれたのだろう?)

巫女として考へてはならない事が、どうしても頭の中を過る。

死因は病死だつた。

流行り病で、三日三晩高熱に苦しんだ結果の最後だ。同じ病で、子供から老人まで、十人近くが死に、先月の赤い月の日も、こうして同じように舞いを捧げた。

…その時は、兄がその病で死ぬなど夢にも思わずに。

(兄さん…兄さん、そこにいる?)

呼びかける。

応える声などないとわかつているのに、その存在を探してしまつ。肉体という器を失つた魂に、口などあるいはしないのに。

(どうか力を貸して。巫女として、最後まで役目を果たせるように。巫女として、最後まで女神の御心を疑う事のないよう!)…兄さんの魂を、無事に送る事が出来るよう(に)。

月は天頂に差し掛かり、娘達の歌は一人きりのものから全員の唱和へと変わつて行く。

少女は焚き火の元へと進み出て、その手にした棒 聖杖を、ゆつくりと目の前へと持ち上げる。そして一度目を開じると吐息を一つつき 再び目を開いた時、そこに少女としての意志は存在しなかつた。

ゆつくりとした足取りから、次第に激しいものへと舞いは変わる。それは誰から教えられたものではない、巫女だけが知る女神の舞い。

杖は時に大地を叩き、時にぐるりと空をかき回して、そこに女神の言葉を残す。

身体の動きに合わせて動く色とりどりの布と糸は、そこに女神の軌跡を残す。

内に女神を宿し、巫女は踊る。娘達は歌い、祈る　　失われた人の、来世での幸福を願つて。

+ + +

長いようで短い一時が過ぎ、再び歌はまるで糸を紡ぐような、一人一人が歌うものへと変わって行く。

巫女は女神の依り巫から、ただの少女へと戻り、また歌の輪の外へと出た。

天頂を過ぎ、ほんの僅かに傾いた赤い月を見上げて、一人呟く。

「…おやすみなさい、兄さん」

残された者に死んだ彼等が残すのは、共に過ごした思い出ばかり。骸は大地に、魂は天にそれぞれ還つた。ならば出来るのは、その思い出の中の彼等を愛しむ事だけだ。

再び生まれてくる生命は、彼等であつて彼等ではないのだから。

「どうぞ、安らかな夢を」

少女は呟き、そつとその目を祈るように閉じた。

+ + +

赤い月が、沈む。

新たな死者の魂を抱き、眠りに就く為に。

月が地平の向こうへ消える頃、大役を果たした娘達は一人また一人と村へと戻つて行く。その顔は疲労感が拭えないものの、何処か充足感に満ちたものだった。

月と、娘達…その全てを見送つて。

一人残つた少女は、ゆっくりと姿を見せる太陽を眩しげに見つめ、少しだけ微笑んだ。

無事に役目を果たした満足感からか、それとも別に理由があつた

のか　そして、少女もまた歩き出す。

死した者は眠りに就き、生きている者にはまた、新しい一日が訪れる。

繰り返し、繰り返し…生命が続く限り。

新たな時間の始まりを告げる朝日の中、少女の目から零れ落ちた一粒の涙が煌<sup>きらめ</sup>き、大地に散つた。

## (後書き)

冒頭部分の詩のようなものをHARに置いていたところ、何故かとても受けがよろしくて、知り合いの方がなんと曲をつけてくださいました。

「なるう」せんではMIDIエーテーは流せないようなので、聞いていただけなくてとても残念です…。

自分でも歌詞っぽいなとは思っていたのですが、それに音が付いた事にとんでもなく感動して、妄想が一気に膨らんだ結果、思い浮かんだシーン（小説のラストシーン）を落書きしていたら小説も出来てしまつたという。

もともと、小説として考えた文章ではなかつたので、バックボーンとか何にもなく、これは本当に即興で書いた作品です。

設定先にありき、が基本なわたしですが、たまにはこんな思いつきの作品を書くのも楽しいなと再認識しました（笑）  
再掲載にあたつて、ルビを打つたのでちょっとは読みやすくなつているといいのですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1198o/>

---

鎮魂歌

2010年10月10日11時24分発行